家族となった動物たちに感謝

旭川市医師会
旭川赤十字病院
中　澤　　修

皆さん、明けましておめでとうございます。小生は昭和21年の戌年生まれで、古希を超えた年男となります。

十勝地方の本別町出生ですが、胎児体験を１つ。母は終戦１ヵ月ほど前（昭和20年７月）、本道で唯一の空襲に遭って防空壕に逃げ遅れた際、巨木に身を隠して戦闘機の機銃掃射を避け、何とか九死に一生を得たそうです。そして母のお腹の中には小生が宿っていました。その巨木は凄まじい機銃掃射のため、無数の弾を身に受けて枯れてしまったと、母の身代わりになったと、お前も守ってくれたと一度だけしみじみ話していました。人生は生まれる前から何があるか分からないものですね。

父の仕事の関係で５歳のとき夜汽車に揺られて札幌に移住しました。29年間暮らしましたが、昭和55年に大学医局を出て、親子５人で旭川に転居しました。旭川に引っ越してきた日、暗くなって夕食の調達に自家用車で出かけたのですが、まだコンビニも無く、右も左も分からぬまま一方通行の２条通りを逆行して冷や汗をかいたことを今も覚えています。以後、旭川赤十字病院に勤務して現在に至っています。

さて、旭川に来て家族として犬を迎え入れたのは、ほぼ１日中雨が降っていた日でした。妻が車で出かけた際、往きの道端で段ボール箱に入れられ、クンクン鳴きながら雨に打たれたままの子犬と目が合ってしまい、帰り道でも同じ状況で、とても放っておける心境ではないと連れ帰ってきたことから始まりました。死別がとても辛いから絶対飼わないと言っていたのですが…。雑種犬で牛のような白黒模様なのでウッシーと名付けました。所構わず用足しをするので急いで大きめのケージを用意したのですが、嫌がって吠え続け、傷つく危険があると感じるほど金属の柵を繰り返し激しく噛むので、根負けしてケージから出し自由にしました。用足しのため、昼夜を問わず数時間ごとに外に連れ出す羽目となりました。案の定、夜間の役割担当を協力させられることとなったわけです。ああなるほど、この子が捨てられたのはこのためも一因かと思いました。われながら頑張った結果、用足しの間隔は長くなり、夜間の役割担当から解放されるに至りました。

ウッシーは家族を大いに癒してくれましたが、10年を満たずして心臓病で天国へ旅立ちました。気付いてあげられず、当時は飼う資格無しとまで悔みました…。

そして数年後、懲りもせず今度は兎が新たな家族となりました。やはり白地に黒の水玉模様で、マーブルと名付けました。真っ白なチビコという伴侶を得て、あっと言う間に７羽の仔を儲け、大所帯に膨れ上がりました。お蔭でわが家の居間からテーブル、ソファーが撤去され、兎用の広いケージに取って代わられたのです。

しかし、これで終わることなく数年後、悩んだ末に結局２匹のペキニーズ犬が加わりました。真っ白いメロンと真っ黒いカリン（勝手にカリメロと呼んでいる）です。独り身となった今、愛すべき兎家族すべての旅立ちを看取り、カリメロと暮らす毎日です。お犬様中心の日課となっていますが、今の小生にとって最後の家族となる動物であろうと思っています。そして大いに癒される日々となっています。…感謝。

メロン

カリン